

## // 卷 頭 言 //

社会福祉法人日本ライトハウス  
理事長 橋本 照夫

「きのう・今日・あした」

はじめに

前号（第76号）では、日本ライトハウスの創立者、岩橋武夫が大正11年に、自宅で点字製版を開始して以来、存亡の危機に見舞われながらも、幾多の変遷を経て、日本ライトハウスがようやく90年を迎えたこと、記念となる式典をヘレン・ケラー女史とゆかりのある中之島公会堂で営んだこと、多くの方々からの祝福と共に、今後の日本ライトハウスへの期待が寄せられたこと、式典が職員の周到な準備と当日の臨機応変な対応によって、とどこおりなく終わったことなどについて書かせて頂きました。

その後、私には、大変な決断を求められるできごとがありました。理事会のご指名により5代目の理事長に推挙されたのです。もとより、岩橋武夫・岩橋英行・岩橋明子・木塚泰弘理事長の人となりを知るものとしては、その重圧は筆舌に尽くしがたいものがありますが、「受けるなら受けるらしく」と就任することを決断しました。

その手始めが、どのような経営理念を旗印として掲げてこの時代を乗り切るのかということでした。日本ライトハウスには、2000年3月に起草された「自立と社会参加のためのパートナーシップをめざして」と題する将来構想があります。ここで言及されたのが、「個人が尊厳をもって家庭や地域の中で、その人らしい自立した生活が送られるように支える」という理念とともに、その実現をめざして各組織の再編や改革に関して以下の要点が示されました。

- ①利用者とのパートナーシップ～利用者主体のパートナーシップ
- ②地域社会とのパートナーシップ～在宅・地域福祉サービスの提供の観点から
- ③スタッフ間のパートナーシップ～福祉事業の創造、推進の観点から
- ④組織の再編成～総合力発揮の観点から

### ⑤経営内容の公開と透明性から～健全経営の観点から

私はやはり、将来構想や提言という視点ではなく、私たちの日々の営みの中で、いま日本ライトハウスに課せられている社会的立場を意識し、経営理念や運営方針を立案することにしました。

## 2. 社会的責任

2000年ごろから、企業では、集団食中毒、食肉偽装、自動車の苦情・リコール隠しなどの不祥事が多発し、消費者軽視・利益最優先、隠蔽体質、ぬるま湯体質、無法状態、無規律、上層部の下部組織や他者への責任転嫁、自社ブランドや過去の栄光へのしがみつき、などなどが指摘され、これまで以上に経営環境や統治能力（ガバナビリティー；governability）が問われるようになりました。それが、企業の社会的責任（CSR：Corporate Social Responsibility）という考え方ですが、当方が社会福祉法人だからといって、それから逃れられるわけではありません。

いうまでもなく、日本ライトハウスは、90年の長きにわたる歴史を誇っており、視覚障害のある方々や社会との「共歩共生」を掲げて支援し、支援サービスを作りあげ提供してきましたが、そのプロセスでは多くのボランティアや援助者の方々、地域の方々、行政機関や事業所の方々などに支えられてきました。また、直面する財政難に対して、心ある方々からのご支援やチャリティーショーや募金へのご協力を頂いており、利潤の追求に関する手続きはありませんが、ご好意に甘えることなく、変化しつつある経営環境に対応するために、事業の健全な成長を進めるという課題が課せられています。また、日本ライトハウスを取り巻く環境は、ますます多様化し、求められるサービスも複雑化・高度化していますが、政府や地方自治体からの支援も減少するという局面を迎えています。

さらに、国連における「障害者権利条約」の制定をめざして、「障害者虐待防止法」「障害者差別解消法」などの国内法の整備も進められています。

しかし、日本ライトハウスには、90年の間に培った信頼と底流にあるパイオニア精神と、視覚障害のある人の、学び・育ち、移動や社会生活、地域活動への参加、コミュニケーションや意思疎通、働くことや所得・消費などに関わ

る総合的な施設としてはわが国唯一の存在です。総合的であるということは、大きなメリットでありプライドです。

また、前述したように、独創性溢れる人間集団として職員の存在があります。よって、日本ライトハウスの使命（ミッション）や政策方針（ポリシー）を以下のようにしました。

①社会の公器であることを自覚し、公正・健全・透明な事業活動を推進します。  
関係者（ステークホルダー；stake-holder）に対する社会的責任（CSR：Corporate Social Responsibility）を果たします。

- 1) 法令や社会的なルールの遵守（コンプライアンス）・・・関係法令や法人が定めた諸規程、法人が培ってきた理念、社会的ルールの遵守
- 2) 情報公開（ディスクロージャー）・・・プライバシーの保護に最大限の配慮をしながら、求められる情報を開示
- 3) 説明責任（アカウンタビリティ）・・・サービス提供に関する説明責任

②信頼され、信任を得るサービスの充実をはかります。

創業以来の自主・自立の精神を重んじる“パイオニア精神”をもって、信頼や社会の信認を得ることのできるサービスの充実をはかる。

③誠実で包容力のある温かいサービスの提供につとめます。

視覚障害のある人の「生きにくさ」に向き合い、「障害者の権利宣言」（2006）で言及されている合理的配慮を遵守するとともに、各種の偏見や差別と向き合う。

④時代や環境の変化に対応した組織として機能するようつとめます。

独創性溢れる人間集団として「働きがい・生きがい」を実感できる職場環境を確立する

### 3. 最近のこと

最近、百田尚樹氏のほとんどの小説を読破しました。いわば、ノンフィクション小説で、詳細な資料時代背景を忠実に示しながら、一人の人物像を克明に書き綴るという手法がとられており、正に「事実は小説よりも奇なり」を実証しているようです。

そのきっかけとなったのは、ある方から『海賊とよばれた男』（講談社／上・下巻）を贈って頂いたことに始まります。作者である百田氏は、関西では馴染みの深いテレビ番組「探偵ナイトスクープ」の放送作家であり、主人公の国岡鐵造のモデルは出光興産を創設した出光佐三さんで、明治18年（1885）に福岡県で生まれましたが、神戸高等商業学校（現・神戸大学）に学び、当初は、「中間搾取のない商い」をめざして、神戸高商卒業後、従業員3人という神戸の小さな会社に入り、丁稚として大八車に小麦粉を積んで神戸の町を歩いたことなど、関西を舞台にしたエピソードがあります。2013年の本屋大賞でもあります。なお、本屋大賞は、2004年に設立された本屋大賞実行委員会が運営する文学賞で、一般の文学賞とは異なり作家・文学者は選考に加わず、「新刊を扱う書店の書店員」の投票によってノミネート作品および受賞作が決定されるもので、「全国書店員が選んだいちばん売りたい本」とでもいうべきでしょうか。

また、あまり言及されていませんが、幼少の頃の佐三は病弱で医者通いが多かったといいますが、高等小学校2年の時に眼を傷つけて視力障害が残り、読書が困難となったということも誘因だったかも知れません。高齢になってから眼の手術をしたともいわれます。

1953年（昭和28年）にイランから石油を輸入した「日章丸事件」の当事者であることなど、正に波瀾万丈の生涯で、自分の信念を曲げず突き進んでいく姿や数々の行動が「海賊」の名を彷彿とさせます。出光興産が提供する「題名のない音楽会」のこだわり、当初は黛敏郎氏の司会、指揮者の山本直純氏、今の司会者佐渡裕氏など、とてもユニークな音楽番組だと思います。また、出光興産では、かつて、「出勤簿なし・定年なし・労働組合なし」といった経営理念はさすがに時代後れとなったようですが。

はじめは、彼の人生こそが一つの手本のように思っていたのですが、彼とともに、仕事に黙々と向かったたくさんの働く人たちや恩人たちが存在したという事実があり、出光さんの言動は、その方々に対する感謝に溢れています。正に、学ぶべき態度です。余り話すとネタバレになってしまいます。このへんにしておきますが、私が読んだ百田尚樹氏の本で、印象の深かった小説は、「永遠の0（ゼロ）」でした。どうか、お読み下さい。